

報



會

會 岳 山 本 日

80

月 十 年 三 十 和 昭

水「ばせを」の
繪から

高橋文太郎

染木照兄と知りあつたのは、最近のことだ。日本山岳畫協會の第一回のときには、未だ會つておらなかつた。しかし、第一回展のときの出品畫のいくつかは、とても印象深く残つてゐた。といふのは、之らの繪が自分によく諒解されて興味をもつたといふより、他の繪と比べて恐ろしく調子がちがつてゐたものだったからだ。イワカガミを描いたものと、雪の村の風景ではあるが、染木君でなければ興味をもちさうもない、均齊のとれた幾つかの杉みたい木々の頭は尙ほ雪に抑へつけられてゐる形のもが並び、背景には多分農家か何かがあつたやうに記憶する。この二つの繪が妙に頭にのこつてゐた。尤も「山」といふ雜誌で、同君の挿繪を見た時が、私にとつては恐らく君の名の知り始めであつたかも知れない。それが、今になつて氣が付いたのだが、「尾瀬の話」といふ私の拙い雜文の始めに、君の描いたリンドウの花が挿繪として、私にとつては全く偶然といひたいのだが、組み合せられてあつた。私は最近、これを或る必要に迫られて讀み返して見るとき、君の特徴ある署名が眼に入り、全く愕いたのだつた。その君を今知らうとは面白い偶然といひたい。

君が美校の時代、山へ旺んに登つて、山岳部の基礎を築いたといふのは、矢張り最近に聴いたことだつた。今年のこの第三回展の前などは、野尻湖から笹ヶ峰の方を、石川、小菅などいふ友人たちと歩いて、まがよくば小谷温泉までのして行くといふ話をきいた。君のこの度の出陳畫は殆どこの旅のときの制作であつた。

話によると、笹ヶ峰の濕地にミヅバセウを見出して、久しく求めてやまなかつた「戀人」に遭つたと言つて小躍りして悦んだとのことだ。その久戀の佛焰苞の持主、ミヅバセウが、こんどの作品の一つとして出された。それから「岩魚」である。同君は趣味として魚釣りを好む。こゝでも相變らず糸を垂れたといふ。會場で、この岩魚は染木君がほんたうに釣つたのかと聴くと、さうだといふ。欣然として君の頬は赭らんだ。君が南洋のパラオ、ヤップ、ボナベ諸島などへ繪を描きに行つた時の話も愉快なものが多い。これらの島のいくつかの魚は大きいが莫伽で、いくらでも針を喰つて懸るが、土人たちは毒があると云つて皆棄ててしまひ、喰はぬ魚が多いとのことだ。自分の釣つた岩魚の繪を描くなんて、之は君にして始めて味得できる境地だと思つた。この「岩魚」の畫面の背景も「水ばせを」の背景も各々工夫があり面白い。「水ばせを」の方は久しい彼の戀人でもあつたためか、

その取扱ひ方が單なるスケッチに終らず、突つこんでいかうとした所もよく現はされてゐて、出品五點のうちでは最も優れており、同君の意圖もはつきりと生かされてゐると思つた。

一體、同君は描く時に頭をつかふ方で、造型的な表現に努力しておられるやうだ。山を背景に農家と放たれた馬を取り扱つた「笹ヶ峰牧場」もよいと思つたが、私の友人は馬の色が少し強すぎて全體の調子が穢かでないとも云つた。その他「雪庇」と「白檜」、何れも山間の生活から遠くない所に畫材を撰んだ點に、こんどの制作の意圖が窺はれる。一緒にビールを飲んで、「山の生活派」だなど冗談まじりに話がでたのも偶然ではない。色感などの點にも、一種獨特な持ち味がみえる。嘗ての南洋での作品には、ちよつと薄氣味の悪い色感を匂はしてゐたが（君の畫室で見せて貰つた分）、之が狙ひ所であらうし又その特色とも云へやうか。こんどの笹ヶ峰での作品では、色調も稍派手に、畫面がすつと明るく動いてゐるやうに感じた。

思ひ出せば、始めて君に紹介されたのは、上杜會の會場の出陳畫の前であつた。眼鏡をかけての同君の印象は、音樂家シューバートを私に想ひ起させるに充分だつた。寫眞で見ることの樂聖の印象より今少し現實的にガツツリとした姿の君であつたが。

主要目次

★水「ばせを」の繪から

高橋文太郎 一

★高橋君の本領

黒田 孝雄 二

★「山の人達」の批評

浦松佐美太郎 三

★盛岡高農の團體登山

★エリブルース 袋 一平 五

★カラコラム遠征資料

藤島 敏男 六

★プロモントアール小舎の一夜

谷 博 七

★ヒマラヤン・ニュース

K2、マシヤブルム他

望月 達夫 八

◇會員通信

◇會務報告

◇編輯室より

其他

チングもやるし、他に土俗的な探索の趣味もあるが、この方は専門家跳足の緻密さがある。

會場で君の繪を前にして、色々な評がきけた。どうも判らない、變な

繪だとか、流行の表面だけを遂つてゐるのだと云ふのや、色感なども前よりは良くなつた、畫材も面白いといふのであつた。特に「水ばせを」

はその植物自體が、いつたい薄氣味の悪いところを持つてゐる。同時に、葉が開き切つた所などは構成的に極めて面白い形となる。こんな所を畫因として狙つてゐる君としては、之はうてつけの好畫材である。君の描く所は、單なる模寫的な寫生に終つてゐないから、制作者がその表現形式に苦心すると同じ様に、觀る方も頭をつかつてその意圖のある所を汲まなければならぬ。斯ういふ一種の様式化から、量とか質とか線の動き方の面白味とか之らを通して表現されてゐる實在感を味つた方がよいのである。色彩の調和の點も、他のこの時の作品に比べれば、「水ばせを」はうまうまいつてゐる。

例へば特定の山を描いた他の人々の場合でも、私はその山をよく知つてゐて、あそこの尾根の線が二つ足りないとか、この尾根はもつと引込むべきだとか、斯ういつた風の註文を云ふのは、觀る方の要求がすでに的端れなので、それはどこまでも一つの表現とされてゐる以上、説明的な追求をもとめられるものではない。しかし、斯んな事は私が何も殊更に云ふ要もないことだ。いかなる様式、表現をとつてゐやうとも、その繪が作者の濃刺とした新しい意味の寫實精神によつて把握されてゐる

場合、吾らの心に訴へられるものは大きい。

以上は染木君をよく知るの餘り、色々言はせて貰つたが、見當違ひの所があるかも知れない。若し有つたなら、いつでもお詫言ひもするし、訂正もする。その個人を理解しないでは、いかなる批評も價值がないと思ふ。唯に一つの繪を見てだけの妄評も批評には違ひないが、こんな立場で攻撃していくと、對手を粉碎しただけに終つてしまつて、何らそこに批評を基にして對手をより良く蘇らすだけの餘裕がなくなつてしまふ。

染木君が山を知つてゐるだけに、その一つの繪について又その繪を藉りて、自分の感想を言はせて貰つた形になつた。現在の處では、まだ君の繪に優雅な味ひなど求めやうとはしない。狙つてゐる意圖をどこ迄も突きつめて行つて貰ひたい。そして君の繪が、イズムとか流派とかに捉はれない範圍でも、もつともつと美しくなることを希つて止まないのである。

最近角田氏と二人で山岳會所藏の幻燈板の整理をやつてゐます。もう二度程夜勤をすれば全部片が付くと思ひますが整理済の上は之が利用方法を大いに考へ度いと思つて居ります。然し場所によつては非常に少ない所がありますので追加作製を計劃して居ります。(I・Y)

高橋君の本領

「山の人達」を
讀んで――

黒田 孝雄

我々が一夜の宿を頼んだ山間の宿屋或は民家の人達には、其の土地の模様を聞いたり、行く先きの山の様子杯を訊ねたりした時、親切に教へて呉れる事もある。が、また胡散臭く扱はれ、いゝ加減に教へられ、却つて飛んでもない失敗をする様な事も聞々ある。それはまだしも全く相手にされないことさへある。普通の開けた山間の部落に於てさへさうである。まして兎角文化に取り残された地方民、この本に出てくるやうな獵師、マタギ、木屋のある部落に於て、かうした苦い體驗を嘗めさせられた例は相當我々の間に多からうと思ふ。

とかく因習に捕はれ易く排他的とさへ考へられる此等の「山の人達」を相手として、彼等の習俗生活、信仰、傳説、口碑などを聞き糾すことは普通の人達には到底出来ない仕業である。高橋君は、かげ乍ら人に知れない努力をこの仕事に拂はれてゐると考へるが、またこの仕事について同君は天才的な力と特殊な技能とを備へてゐるといつてよい。彼等とキロリを取圍んで、氣長にボツリボツリと話し合つてゐる間に、漸く相互の氣持も打ち解けて腹を打ち割つて親

しくなり、その間に巧に聞かうとする話の緒口を掴む。この本を讀んでゐる間に、私は著者のこうした姿を頭に浮べて見て微笑ましくさへ感じた。

かうした特殊の嗅覺(?)をもつた著者が、尾瀬を幾度か訪れてこの地方の自然や人の變遷を語り、ある時は東北朝日山麓の三面を訪れて方言を採集し、この村人の生活を描き、或る時は奄美十島を訪れてこの南の島の人達の生活を記し、ある時は東北飯盛山中の赤谷に入つて、マタギの熊狩に加はり昔乍らの彼等の習俗を見聞し、印象を語り、また會津の山奥に木地屋の生活を訪れてゐる。かうした採集訪問の印象記、報告記が、この本の半分を占めてゐる。高橋君としては最も得意とする部分であるだけに、我々の本書に對する興味の大半はこの部分にかけられるわけである。

も、路傍に立つ一本の木にも著者のあの細い目は向けられ、それぞれに何かの意味が讀みとられる。私などから見れば、一つの山道を歩くにしても、いろいろな風物に注意を配らうといふのだから随分神經を尖らせ疲れることだらうと餘計な心配を抱かせられるが、高橋君の場合にはそれが本能的に自然に行はれるらしいので、私が心配するほどでもないであらう。遅くなつてやつと辿りついた寒村の一家に疲れた足を延す暇には、高橋君の目にはその家の間取、諸道具、神棚までが映つてくるのであらう。

かうした眞摯なる態度はもとより著者の民俗方面に於ける學問的興味から出づるものであるにしても、この場合單なる興味以上のものが其處にある。高橋君の山に對する愛は山のみに止まらず、それを背景として生活する人達にも分ち與へられ、その愛が高橋君をしてかうした態度や努力に現はれてゐるのだと考へたい。また登山の間にかうした觀察や採集を行ひ得るやうな餘裕をもつ著者の環境を我々は羨ましくさへ思ふ。そしてこれらの事實を、何等の歪みなしに、また自己流の解釋を通してでなく、努めて客觀的に、そのありの儘を、飾らず興味深く記述し報告してくれたことを、私は一個のこの方面への門外漢とし感謝する。



「山の人達」の批評

浦松佐美太郎

高橋文太郎氏の「山の人達」は、種々雑多な山に關係のある文章を集めて一冊にしたものであつて、大部分は一度發表されたことのあるものである。そのうち同氏が専門とせられると云ふ民俗學に關係のあるものが五つ六つと、登山に關係のあるものが幾つかと、それから、其他の部に屬するものから成立してゐる。民俗學に關係のあるものは、その道の専門家の批評に譲り、此處には、登山に關係のあるものを批評することとする。

高橋氏は、登山に關して、「山と民俗」と題する一篇の中で、「一體、山登りの世界には、どこまでも行爲を遂行して新記録を作らうといふ思想の流れと、第一義の目的をさういふ記録にのみ置かず、山をもつと廣く考て思索の對象とする思想との流れ

があることは見受けられる」と書いてゐる。登山界に以上の様な思想の對流があるが如くに説く人は、從來も屢々あつたが、之は登山に對する考へ方の徹底しない所から生じた考へ方の混亂である。山を登山の對象とせずに、山を思索の對象とすることは、思索の世界の問題であつて、登山の世界の問題ではない。思索の世界の問題を、登山の世界に引張り込んで、登山界に思想の對流ありと云ふのは困つたことである。又之とは別に切り離して見ても、記録、作成、思想とする登山などと云ふものを、持ち出して來るのも困つたことである。「登山をもつと廣く考へて思索の對象とする」ことを、高橋氏に勧め度い。

又「山案内の發生」と云ふ一篇は、本邦の山案内のことに就て記したものであるが、之を通讀しても、何時何處で如何にして、山案内が發生したのか、少しも高橋氏は説明してゐない。色々の本から山案内の記事を抜書きしたものであるが、之等の記事の考證でもない。山案内發生の史的研究では勿論ない。恐らく、題名の「山案内の發生」と云ふのが間違つてゐるのだらう。此の本文を讀んでゆくと、播隆上人の槍ヶ岳登山の事項を以て、節が切れる所がある。するとその次の一節は、「茲で一應わが國に於ける純スポーツ登山が起つた」と云ふ文句で始まつてゐる。之には評者も少々驚かされた。何が、一

應なのだか、一體何が茲でなのか、播隆上人と純スポーツ登山とその間に何の關係があるのか、兎も角も驚かされた次第である。

それから此の本には、外國の登山家或は登山史などに關係のあるものが、四篇ほどあるが、之等は、いづれも高橋氏の勇敢さに感歎するものばかりである。簡単に云へば、盲蛇に怯ぢずである。之等諸篇のどの一頁からも、高橋氏の勇敢さを示す例證を、拾ひ上げて來ることが出來よう。之は正誤表ではないのだから、茲には、高橋氏が如何に勇敢であるかを示せば足りるであらう。

「マーチン・コンウェイ傳」と稱する一篇は、本書の中では、他のものと比較して遙かに長い論文である。然もその長さに正比例して、質の低い論文である。

表題の傍に、英文でコンウェイの名前を書いてあるが、茲には、サーの稱號を冠したコンウェイの名前と、ロードの稱號を冠したコンウェイの名前と二つ並んでゐる。何のつもりか解らないが、評者から見れば、傳記作者としての盲蛇に怯ぢずが、こんな所によく現れてゐると見るの他はない。

此の「コンウェイ傳」は、極く常識的に、コンウェイと云ふ人が、如何なる人であり、何を本來の仕事とした人であり、何によつてサーの稱號を與へられ、何の功績によつて後には貴族に列せらるゝに至つたかを、高橋氏が全然理解しないで書き上げた傳記である。少くとも、つましやかに、登山家としてのコンウェイのほんの一面だけでも、よく熱心に書いてあるかと思つて、その所々を丹念に讀み返して見たが、高橋氏はコンウェイの登山家として發表した書物すら通讀するの努力を拂つてゐない。

此の「コンウェイ傳」は、コンウェイその人に對する何等の理解なく、二三の本から抜き書きして寄せ集めて來たに過ぎないものである。その上に、その抜き書きにも、誤讀誤解が多く、更に、高橋氏は、事實とは無關係に、之等の抜き書きを基として自由に臆測を加へ、批評を加へて行くのである。従つて、コンウェイが「臆面もなくヒマラヤの地圖を作つたり」「流石に氏の如き人にして興味」を感じたり、或は「友情に溢れ」たり、或は「旋曲りの性向」があつたり、又ブルース將軍がマンマリーとコンウェイの心を結んだり、マンマリーが遭難したのは「必然」だつたり、色々のことが起るのである。又クリーツの事に説き及び、「Conway & Colledge, Climber's Guides」なるものが、この兩人の名前を唱つた叢書として現はれてゐる」と書いてある。之がコンウェイの傳記作者の言葉だとは、恐れ入るの他はない。コンウェイが「その生涯の重要な期間略々三十年を山登りのために捧げた」と云ふに至つては、膽

がつぶれるばかりである。どう云ふ氣持ちで高橋氏が、何を苦しんでこんな「コンウェイ傳」を執筆し、茲に再録したのか、全く理解が出來ない。

「初期アルプス描寫家たち」と云ふ一篇は、グリッパルの登山家列傳と、ピーヤのアルプス旅行者の二冊の本に挿入された、寫眞版の挿繪とその挿繪目次によつて書かれたものである。茲でも、評者は、高橋氏の勇敢さに驚歎するばかりである。

「初期」と表題に書いてあるが、一體何の初期なのか、本文には少しも示されてゐない。本文は、「その頃の」と云ふ文句で始まつてゐる。昔の版畫を縮寫した粗雑な寫眞版の挿繪から、原畫を評價して「當時にあつては恐らく驚異に價する」ものであつたり、「その魅力に於ては確に秀逸」であつたり、「スケッチの手際も並々で」なかつたりするのである。もつと驚くことは、「初期」や「その頃」のアルプスの繪描きは、グリッパルやピーヤの本の目次に掲載された人達以外には、存在してゐないことである。そして高橋氏によれば、此の二冊の本の挿繪目次に名を載せられた版畫の作者は、「山岳畫宗祖」とも云ひ度い人達だとのことである。更に驚くことは、グリッパルの本の内容や目次の讀違ひ、乃至は誤讀をやり、その誤解を基にして、例によつて推測で議論を進めてゐることである。「例のグリッパルは記して

ある」とか、「例のクリリツヂも記した位である」などと書いてあるが、例のグリツアルも、例のクリリツヂも、そんなことは書いてゐない。繪畫史を論じ、版畫の價值を評價するのに、登山家列傳が何かに挿入された、寫眞版とその目次の説明で片付けてしまふ勇氣には、驚くのはない。

「山岳畫家コンプトンその他」と云ふ一篇は、何を目的として書いたものやら、全く理解が出来ない。之も頁數から云へば相當長いものである。何の爲めに三十頁も費してこんな記事を、此の本に再録したのか、評者には全く解らない。

最後に、「ウインバー父子の木版畫」と云ふ一篇がある。之はウインバーと云ふ署名のある挿繪の入つた本の何冊かに就いて、その木版を父のウインバーが彫つたものか、息子のウインバーが彫つたものかを、考證する目的で書いたものらしい。併し、高橋氏は、木版の彫り方そのものの鑑賞はせずに、署名の字體から、その何れかを決しようとするものらしい。併し、本文には、何等決定的な研究の結果は示されてゐない。例によつて、推測臆測だけである。従つて高橋氏の考證の方法は、まことに杜撰である。ウインバーの挿繪のある書目の考證を、古本屋のカタログでやつて除け、之で大體差支ないと思ふなどと云つてゐる。調べるだけの眞面目さがあれば、直ぐ手近に

解することも、調べるだけの努力を拂はずに、他の場合と同じ様に推測で片付けてある。例へば二六四頁に、ウインバーは一八七一年には、「ロングマン書店に關係をつけて、版畫家としての社會的位置を確保しようとする望の切なりしことも推測に難くない」と云つてゐるが、高橋氏がウインバーの監修になる挿繪が入つてゐるといふ「峰、峠、氷河」は一八六二年にロングマン書店から出版されたものであり、又同じ様にウインバーの挿繪が入つてゐると高橋氏の云はれる、チンダルの一八六二年の登山の本も、出版書肆はロングマンである。之だけの事實を調べただけでも、高橋氏の云ふ「ウインバーがロングマン書店と關係をつけ度い望の切なりしことも推測に難くない」と云ふ推測が、甚だ困難なこととなる。之は唯一の場合ではなく、先にも何度か述べた高橋氏の議論が、多く推測に基き、然もその推測がいゝ加減なものであると云ふことを、その一例として此處に示したのである。

更に、「此のウインバーの切なる望み」を推測した高橋氏一流の推測の根據が、チンダルの序文の誤讀から生じてゐるのだから、一層驚かざるを得ない。他つ場所でも、高橋氏が誤讀誤解を少しも意に介せずやつて除けてゐることを指摘して置いたから、その一例として、此處に誤讀の如何なるものかを示して置かう。二六三頁にチンダルの序文の抜書とし

て、「ウインバーはロングマン書店に對しイニシアチブをとる爲め彼の版畫挿入を敢て爲さねばならぬ事情になつたのである」と書いてあるが、チンダルはその序文で次の様に云つてゐるのである。「挿繪はロングマン氏の發意によつて入れたものであるから、讀者は挿繪が氣に入つたら同氏に感謝していただき度い」と。コンウェイ氏も、アルプス描寫家たちも、皆この調子である。驚くのはないといふ理由が之である。

此の様な杜撰な考證の仕方、推測で勝手に片付けてゆく研究方法、誤讀による議論、こんなものは、本書に収められた之等數篇の論文に限ることであつて、他の高橋氏の著作に及ばないものであることを希望して止まない。

私が本書に對し、可成長い批評の筆を取つたのは、山の本と云ふと随分いゝ加減のものでいゝと云ふ氣風が、一般に廣がつてゐることに注意を喚起し度いと思つたからである。眞面目に、正直に、努力して書いたものならば、必ず何等かの意味で人を益するものであり、優れたものもその中から出て来る筈である。いゝ加減のものが、後から後から出て来るのは、日本の山岳界に眞剣味の足りない證據だと思ふ。何でも書けばいゝと云ふ間に合せではなく、確かりした眞面目なものが、どしどし出るやうにならなければ駄目と思

ふ。いゝ加減のものが臆面もなく出版出来ること云ふ、日本山岳界の此の弊害の責任は何處にあるのか。之は重要な問題として、日本山岳會でもよく検討すべきものではないかと思ふ。據つて来る所深く、捨てゝは置けない問題と思ふ。ヒマラヤを考へるのもいゝが、そんな遠く高い所を見ずとも、低く近い所に、爲すべき

盛岡高等農林學校の團體登山(八幡平)

まづ盛岡高農の紀正之氏よりの通信を左に掲げる

——我々で全校登山を創始したのは既に十五年前の事である。學校長以下職員學生全部の参加を原則とし其の趣旨は全員苦樂を共にし心身の鍛鍊と大自然に接して浩然の氣を養ふ傍ら實地の見聞を擴めるにある。

食料防寒具等は一切持参し宿營とは名許り皆携帯天幕を結び或時は純然たるキャンプもやる。大部隊となる關係上乗物は汽車以外を利用せず徒歩主義を採るから數人の登山の様に簡單ではない。

本年は第十五回全校登山を八幡平に實施した、總員四百五十名恐らく全國に其比を見ない異色ある大登山であらう。之はもと校友會山岳部の行事としてやつてゐるが現在學校の行事とし山岳部は協力する形となつてゐる。

學生三八六名を甲乙二隊に分け各隊を又一七—四七名の小班に區分し

重要な問題があると思ふ。之を片付け得ないで、空の星を箒で拂ふ様なことをすれば、ひつくり運るに決つてゐる。自分の足下に氣を付け、山の高さよりも自分の質の高さを、遙かに高いものとする努力を希望する。思はぬ長い批評となつたが、期する所あつて書いた次第である。

て班長及副班長を定め且つその外に庶務、經理、指揮、撤紙、衛生、地質、植物、昆蟲、鳩、寫眞、職員點檢、設營の十二の掛を設けて總人員は四五三名となつてゐる。

コースは盛岡驛を起點とし小豆澤驛まで汽車の便を藉り坂比平の上の分岐點で甲隊はフケノ湯より八幡平に登り歸途を玉川温泉經由とし乙隊は先に玉川温泉に至つて甲隊の逆コースをとる。前記の分岐點で兩隊合同の上歸途につく。兩隊ともフケノ湯及び玉川温泉の二ヶ所を宿營地として食事は總て飯盒炊きで行ふ。

結果報告がまだ來てゐないので何とも云へないが之だけの六掛りの登山は一寸比類がない。純然たる登山といふ見地から之を批評する事は姑らく避けたいと思ふが、團體訓練とか精神修養の目的からすれば最も適つた行事ではないかと考へる。

(吉澤)

エリブルース

袋 一 平

國立旅行協會（オプテ）とソ聯翰林院とが協力してエリブルースに完備せるホテルを建設しようとしたのは一九三六年の春であつた。翰林院の建築學教授でアルビニストであるボボフ、ジェルン、カトウールの三名が設計し、ア・ジマツスキ技師が現場監督に當ることになり、爾來三年越しの苦心が報われ、近く完工の運びとなつた。

ホテルの位置は現に木造の「第十一番小屋」のある所で、海拔四二〇〇米、現在では世界最高位のホテルだといはれてゐる。

工事は想像以上に複雑困難を極めた。その根本の困難は建築材料の運搬にあつた。最初の考へでは強力な飛行機で材料を運び、上空からパラシュートで投下することを第一とし部分的には騾や牛を用ひることにあつた。だがこの計畫はいさゝか空想に過ぎる。七五〇トンの積荷を運ぶにはさし當りどんな飛行大艦隊を編成しても峠が明かないし、また牛の背中を用ひるとすれば、二五〇頭を働かして二ヶ年かゝる。然るに仕事は極く短期間でやらねばならぬ。氣象的條件はエリブルースで一年間に仕事し得る期間を僅々三五日乃至四〇日しか許さない。

結局、機械化運輸の方法が残され

した。道は開いた。續々とトラクターがテルスコールと小屋との間を往復し、その能率も段々に上つて來た。

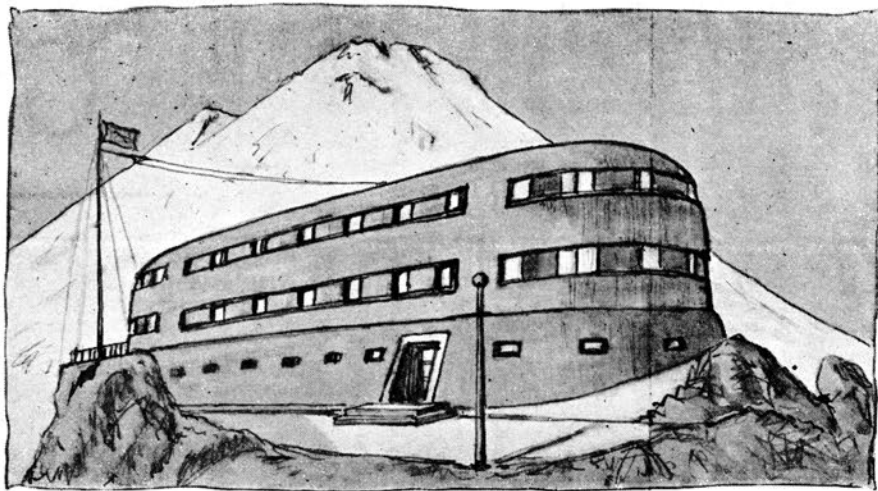
前記二人は九月二十一日には九トンを引張り上げた。

基礎的な重要な材料はかくてあらかた敷地に持込まれたのであ

る。秋の進む頃にはホテルの第一階の部分に石で築き上げられた。この上に木造の二階と三階とがつけたいので材料はナリチク町の木工場で

完成の上既に現場に届けられてあつたが、冬が豫定より早目に訪れたので、そこで一九三七年の仕事は幕を閉じた。

一九三八年の三月早々、技術者達は張切つて中央よりカフカズに向ひ出發した。二階と三階とを組立て、外部を亜鉛びき鐵板で張り詰めるのである。内部は木造であるが、この



木の壁と外部の鐵板との間には熱の絶縁物を詰め、どんな氷寒の時でも猛烈な雪嵐の時でも、内部の温度を常溫に保たせるやうにする。ホテルの建物は高山にも似合はしからぬ瀟洒たる三階の流線型である。それは物凄いは破壊力を發揮するこの山の嵐に抵抗するためである。登山者の便宜には充分の配慮が拂はれ、四人部屋四十室（定員一八〇名）の他に、浴室、食堂、スキー置場、寫眞現像室、ラヂオ、發電所、荷物預り場、乾燥室等がある。發電設備は最初は風車を利用する筈だったが、その後、ホテルよりあまり遠くない所に一年中凍結しない大瀧を發見したので、そこに發電所を置くことになつた。ホテルの前庭には強力な燈臺及び大サイレンを設け、登山者の目標に役立て、また正に來らんとする嵐や悪天候に就て警報を發することになる。

四二〇〇米のエリブルース・ホテルはかくて本年の登山季節（七月、八月）までには完成することになつたのである。

×

次に、もう一つ、エリブルースに高地研究所の本格的な建物が建つことを報じよう。これは前記ホテルよりも少し高い位置、「第九番小屋」のある四二五〇米の所に「ソ聯翰林院高地研究所」として、科學的諸研究のために設けられるものである。

既に四ヶ年に亘り、翰林院は全聯邦實驗醫學研究所と手を組んで、カフカズの山々、特にエリブルース及びカズベツクを中心に、科學研究遠征隊を派遣して数々の收穫をあげて來てゐる。エリブルースに就て言へば、これを最も好適な「天然バロカメラ」と見て、累年その研究の高度を上げて行つた。翰林院のヤコヴレフ教授を隊長とする一九三六年夏の遠征の時の如きは、觀測根據地を「セドロヴィーナ」にまで引きあげ

てゐる。これはエリブルース双峰の間の「鞍部」の意味で、五三一五米の高さにある。その上、ゲ・ウラデミエロフ及びイ・デデュリンの二教授は八月十四日から十五日にかけて最高峰たるエリブルース東峰、五六九五米の頂上で、命がけの徹夜研究をやつた（簡単な記録があるから別の機会に紹介します）。

高地研究所の設計によると、三千立方メートルの容積を持つ三階建の圓形の建築で、この形はホテルの流線型と同様な意味に據るものである。光學實驗室二つ、宇宙線研究室二つ、無電、寫眞、生理學、光線生物學、生物化學、地球物理學等の實驗室各一つで、いづれも現代技術の粋をついて整備される。屋上には光學的觀測用として二つの大なる廻轉圓屋根が置かれる。また實驗に供する動物を收容する特別室と、農村經濟文化に役立てるための高山岳温室とを備へる。こゝで働く常置員は五〇名の豫定で、各人の部屋その他に、娛樂室、圖書室、食堂、一人用の浴室等が完備される。電話及び無電によつて山麓ナリチク町の高地研究所支部及びモスクワ本部と連絡する。電源は風力發電機によるか、或はホテルより供給を受けるか、まだ決定しない。建築材料はそこらにあり餘るほどある花崗岩を用ひ、一階と二階を組立て、三階だけは鐵骨の上に亞鉛引き鐵板を張ることになつてゐる。

研究項目の主なるものとして山岳

における放射光線の分布狀態、大氣の高層、太陽放射線、夜空の微光等の研究、高層氣象學的觀測、雲や空電の研究、高地に生活する人間との關係における醫學的及び生理學的の研究、植物生理學の研究等々が挙げられる。

今日までエリブルースの越冬隊は浮世との連絡を絶たれてゐたが、高地研究所の連中はこれからは秋も冬も天涯の孤兒となることはあるまい。翰林院の依頼によつて、全聯邦自動車トラクター研究所では既に特殊な無限軌道タンクの建造に着手した。一年の如何なる時でも、第九番小屋まで、即ち高地研究所の敷地たる四二五〇米までは上れるやうにする。このタンクが飲食物とか燃料とかを運び上げるであらう。

高地研究所はまた五六九五米のエリブルース東峰の絶頂に設けられる翰林院科學ステーションのための根據地ともなるのである。

高地研究所建設委員長には翰林院成層圈研究部長たるエス・ヴァウイロフ教授が選ばれた。完成の曉には多分その所長となる人である。仕事は順調に進めば完工は來年秋になる豫定である。

圖書室開室日時

月水金 午後五時—九時
火木土 // 一時—五時



カラコラム遠征資料

藤 島 敏 男

佛蘭西のカラコラム・ヒマラヤ遠征の費用に關しては本誌前號にその收入の大綱を報告しておいた。遠征隊長に面會の際、思ひつくまゝにきいたことを、何かの參考にもならうかと、既に立教山岳部のナンダ・コツト遠征で、本邦登山界の常識になつてゐる事柄も少くはないと思ふが茲に略記する。記述の順序は當時のノートに走り書きしたものを、別に整理もせずそのまゝであるから或は雜然としてゐるかもしれない。

一、孟買カラチ間の交通に船によると汽車によるとは經費に大差あり、幾分餘裕をみて出發し、船によるべきである。

一、カラチ、スリナガール間、七人の隊員と十三噸の荷物で約四千留比を支拂つた。

一、スリナガールでは滞在に、ハウスボートを借りるが得策、一日食事共一人三留比八安位。

一、スリナガールでは、滞在、運輸その他の事務處理のためコマーシヤル・エージェンツを頼むといふ。Cookburn Agencies, Kashmir Express Company 等々。

一、三十五人のシエルバをダーズリンからスリナガールまで呼寄せるに要したる費用は約二千留比。

一、シエルバの雇傭に付いては、ダーズリンのヒマラヤン・クラブに書面を以て依頼したが、これで充分ことが足りた。

一、シエルバが入山中、留守家族の生活費として四百留比（全體の分としては少きに過ぐと思はるゝも暫くそのまゝ記載す、筆者註）を前拂ひした。支拂はすべてクラブを通す。

一、英國のトランスポート・オフィサーとは孟買にて落合ひたり。旅行中物資の買入其他に付き有益なるアドヴァイスを與へたるも、或る場合には意思の疏通を缺きたることもあり。

一、旅行中オフィサーの要する費用は總て遠征隊が負擔し、引上げに際しては謝禮としてコンタックス・カメラを贈りたり。

一、人夫賃
シエルバ、氷河にかゝるまでは一日十三安、氷河にかゝつてからは一日一留比。

料理人 一日 一留比八安
サーダー 一日 二留比八安
通 譯 一日 三留比二安
地許のポーター、スリナガールから

ゾーヂ・ラ越え、五日間にて七留比、ゾーヂ・ラを越えてからは一哩につき二分の一安に始まり、進むに従ひ一哩一安、一哩一安二分の一と累増する。Skardu-Ashkoley 間は一人に付十四安（十日分）。アスコレイからベース・キャンプ迄は一日一留比と食料を給す。（アスコレイまでポーターには食料を給せず）。尚シエルバ及びポーターに解雇の際與へる心付は連絡オフィサーの意見に従ひ約一〇%とした。

一、シエルバには、下着、衣服、靴靴下、手袋、ビツケル、クランボン寝袋等總て隊員と同じ物を與へ、天幕も隊員と同様のものに宿泊せしめた。

一、シエルバの着衣類はスリナガールにて購入した。シエルバに支給する靴は、彼等が靴に慣れざるより横幅廣く、稍大き過ぎる程度のものがよい。靴のサイズは三九乃至四五。

一、ポーターには雪眼鏡のみ給す。

一、シエルバ、ポーターに支給したるものは解雇の際與へたり。

一、シエルバは肉類も好む。ポーターは肉食せず、殊に牛を神聖視するより、雜詰の外部に牛の繪を表示せざることを肝要なり。ポーターは牛肉以外の雜詰、特に鰯などを喜ぶ。

一、本國への電信料非常に高し、出發前新聞社通信社等と契約し置きプレス電報とする方得策なり。

一、ヒドン・ピークにフランスより再舉を企てる計畫あり（筆者註、一

九三八年決行の豫定なりしも、資金その他の事情にて目下の所實行期未定。

一、ブロード・ピークの第一峰は殆んど登頂不可能、第二峰は幾分容易ならんかと思はる。ガツシャールムは登路非常に長く頗る困難なり。

一、K₂は困難といふより寧ろ不可能と言ひたし。尙ほK₂に向ふ場合アスコレイからベース・キャンプまでがヒドン・ピークの場合に比し二日行程長くなる。ポーターはベース・キャンプまで終始野天に寝る、之は數百のポーターのための天幕を用意し得ざるためなり。フランス隊の時は幸ひにして天候に恵まれしが、萬一荒天に遭へば翌日の行程に甚大なる影響あるを豫期すべし。従つてこのアスコレイ以後の行程に於て二日間の間は登山隊にとつて等閑視し得ざる大問題なり。

一、アスコレイからベース・キャンプまでアブルヂ公の険はリレー式にポーターを使役したるが、純スポート登山にあつては、全裝備が同時にベース・キャンプに到達するを得策とすべし。

一、酸素吸入器は醫療用として持参したり。登攀に際しては全然之を用ゐず。

一、醫藥は別に特殊のものなし。病氣に罹れば、回復非常におそく、山中にある間は到底健康體に復せざるものと覺悟するを要す。土民にアスピリン、重曹等をやると非常に喜ぶ

一、ラヂオ、測量觀測器具携行したるも、高所に於て疲勞甚しく、餘り之等の器械を活用する機會なかりし余がフランス隊々長から聞き書きしたところは以上のやうなものである。將來日本からヒマラヤに遠征隊を送る場合何等かの參考資料になれば幸ひである。

プロモントアール 小舎の一夜

谷 博

一九二七年の夏も終り近く、その日メイヂユの南壁は雨をふくんだ暗雲に固く閉ざされてゐた——なんかと書き出すとまるで私自身がドフイネの山々をかけつり廻つてゐたかの様ですが、實際はその頃早大や大島氏の遭難を聞いて「冬の日本アルプスに登る凄人もあるのだなあ」と感心してゐた可愛らしい中學生だつたのだから、これはつまり最近に二冊の本を首つびきにつくり出した想像なんです。「マロリーはヤングハズバンドの少年だつたに違ひない」といふ有名な與太には思ひ及ばぬにしても、この南佛の岩山を背景にして二組の登山家の邂逅を想つての微笑なんです。

「Ein Weg nach Nanga Parbat」のメルクル達と「アルプス記」の松方氏一行。そしてその各々から得た印象ではどうやらお互にその國籍丈は

判じたものの、何處の誰人ともわからずに、凄くハリキツてゐるが、な位の所で左様ならしてしまつたとしたら、同じく松方氏の「追憶」以上に更に強く僕の胸を搏つものがありました。慥かに「小舎には二人の日本人がグリッペンデルワルトの案内人をつれて先着してゐた。翌日彼等は出て行つた。夜迄待つてゐたが歸らなかつた」と書いたメルクル達にはそれが後の吾が瑞穂の國の山岳會副會長であらうとは夢思はなかつたらうし、血を吸ひきつただにの様に膨んだルツクザツクをしようてやつて来た」二人のフューラーローゼが後年ナンガ・バルバツトで逝んだ隊長であつたとは尠くともその時は判らなかつたのぢやないだらうかなどとナマ云つたら叱られるかしらん。

翌日四人組がアラシを銜いてメイヂユの縦走をやり卒せた後を獨人組が指を叩へて残念がつたかと思ふと頁を繰りながらニヤリとしたのは僕一人ではない。「萬事休矣」とまでいつたかどうかは別として「とに角、その二人づれがその夏のメイヂユ登攀の最後の機會をのがしてしまつたことは事實である」といはれてみるとプロモントアールの小舎の一夜は徹頭徹尾日本外交の勝利に歸したやうです。

會費の拂込未済の方は
至急御願ひ致します。

軍機保護法の施行と 撮影等の注意 (三)

「山日記」より

軍機保護法施行規則（海軍省令第二十八號）第五號

軍機保護法第十二條第一項ノ規定ニ依リ左ニ掲グル行爲ハ之ヲ爲ス事ヲ得ズ但シ第一號又ハ第二號ニ掲グル行爲ニ付テハ海軍大臣ノ、第三號又ハ第四號ニ掲グル行爲ニ付テハ當該鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラズ

- 一、左ニ掲グル區域ニ於ケル航空
- (一) 軍港、要港又ハ防禦港
- (二) 平塚市及神奈川県中郡大野村
- (三) 東經百四十四度以東ノ北海道及千島列島並ニ其ノ地先三海里以内ノ海面
- (四) 伊豆七島、小笠原諸島及硫黃列島並ニ其ノ地先三海里以内ノ海面
- (五) 北緯三十一度以南ノ鹿児島縣及沖縄縣ノ諸島並ニ其ノ地先三海里以内ノ海面

- 二、左ニ掲グル區域内ノ雲ノ高さ、雲ノ厚サ、霧、煙霧若ハ大氣ノ透明度又ハ同區域ノ地面上百メートル若ハ海面上百メートル以上ノ空域ニ於ケル氣流、溫度若ハ濕度ノ器具機械ヲ以テスル觀測（觀測成果ノ作成ヲ含ム）又ハ觀測成果ノ

複寫若ハ複製但シ船舶若ハ航空機ノ航行若ハ航空ニ必要ナルモノ、官公立ノ氣象ノ觀測所ニ於テ行フモノ又ハ法規ニ依リ官公立ノ氣象ノ觀測所ニ報告若ハ通報スル爲行フモノヲ除ク

- (一) 前號(三)乃至(五)ニ掲グル區域
- (二) 北緯五十度以南ノ樺太及其地先三海里以内ノ海面
- (三) 東經百二十七度以東北緯三十九度以北ノ朝鮮及其地先三海里以内ノ海面
- (四) 臺灣及其ノ地先三海里以内ノ海面
- 三、第一號(二)乃至(五)ニ掲グル區域内ノ水陸ノ形狀若ハ施設物ノ狀況ノ測量（測量成果ノ作成ヲ含ム）又ハ測量成果ノ複寫若ハ複製但シ地目地類ノ變換、土地ノ分合、境界ノ確定若ハ家屋、倉庫ノ新築、改築、増築ノ爲必要ナルモノヲ除ク
- 四、前號ノ區域内ノ水陸ノ形狀又ハ施設物ノ狀況ノ空中、高所ヨリノ撮影又ハ其ノ複寫若ハ複製但シ複寫體ヨリノ高さ百メートル以下ノ場合ヲ除ク

(以上)



ヒマラヤン・ニュース

K 2

K2へ向つたアメリカ隊の消息は本誌前々號に既述せられてをるが、其後の経過を略述してみよう。一行はアラスカ及ナンド・デヴィの經驗を有するヒューストンをリーダーとし、R・ベイツ（アラスカに於て豊富な經驗を有す）、R・バードサル（ミヤ・コンカの經驗あり）、W・ハウス（ウオデイングトンに登頂す）、P・ベツツオルト（ロツキーに多くの足跡をのこす）、ストリート・フィールド（佛ヒドンピーク遠征隊の一員）の都合六名であつた。彼等はK2の東北尾根上二六、〇〇〇呎に達したが、遂に退却の止むなきに至つた。六月十二日彼等はゴドウィン・オウステイン氷河の堆石上一六、六一五呎にB・Cを置き、十三日は降雪の爲無爲に終つたが、翌十四日からK2の偵察を開始した。先づ最も可能

性ある西側に注目し、一行六名はシエルバを連れてサヴォイア氷河を登つた。新雪に覆はれた蛇の様なクレヴァスに、又陽光に融け出したクラストに悩んだ擧句、ベイツ、ストリート・フィールドはシエルバを連れて一旦B・Cに戻り、残りの四人のみ前進した。かくして十五日は悪天候に遭遇したが十六日、二〇、〇〇〇呎にキヤムプを進める事が出来、眼前にサヴォイア・パスを望み見る地點迄達した。若し此の時パスに到達し得たなら其後の西北尾根の登攀は非常に可能性ある如く思はれたのであるが事實は之に反してパスに達する事は出来なかつた。十七日ハウスとヒューストンとは早朝にキヤムプを發し二一、〇〇〇呎に達し、更に壁下の錯綜せるベルグシュルンドを越へてパスの直下八〇〇呎に至つたが堅氷上に不安定に積れる新雪は到底荷を背負へるボーダーに不向きなルートな

ることを知つて今年の狀態ではこの可能性ある西北尾根のルートに不可能と斷じたのであつた。悪天候の爲前進せる連中は一旦B・Cに引上げたが、十九日ハウス、ベツツオルトは他のルートにてパスに達せんとしたが、深雪の爲目的は達せられなかつた。其後更に西北尾根より發する急な岩と氷の小尾根に沿ふたルートによりパスに到らんとし、ベイツとハウスとは、クランボンを着けて發足し、

岩場下の雪に沿ひ次いで急峻な氷のガリーを攀じて小尾根の上に出た。此の登攀にはビトンを使用し、又時間も多く費やし、然も此の小尾根は氷に覆はれた崩壊し易きスラブで逆も望は無かつた。翌日も右の二人は二〇、〇〇〇呎以上に達したが、この小尾根の反対側も同様登れそうにはみえなかつた。

かくして彼等の結論は本年西北尾根の登攀は不可能なことに一致し他の方面に注目することゝなつた。が雪及氷の狀態さえ良好なれば此の方面からの登攀は決して不可能ではないと云はれてをる。以上の如き西面の偵察が遂行されてゐる間、一方ベイツとストリート・フィールドとはK2の東南側を偵察し、東南尾根（又はアブルツチ稜）を目ざして進んだ。ゴドウィン・オウステイン氷河からはこの尾根上に、二つの悪場が見らるゝが、二人は之を偵察する爲に出發した。彼等はゴドウィン・オウステイン氷河沿ひに進み、キヤムプを設けた。この氷河のセラツクは實に危険で、翌日も多くの崩壊して荷上げ中のヒューストン及ボーダー達のすぐ近くを落下した。ベイツとストリート・フィールドは悪天氣に阻まれ東南尾根に關して餘り多くを知ること無くB・Cに退却を餘儀なくせられたが、二十一日には全員が前記のキヤムプに再び來たり、此處からヒューストン、ベツツオルト又後にはハウス、ベツツオルトのパーティが種々

々の有利な地點から東南尾根を隅なく偵察することが出来た。之等二組の者の結論は、若し尾根上にキヤムプ・サイトが見出さるゝならば、困難は相當あるにしても二五、〇〇〇呎迄は達せらるゝ。只それ以上に何が在るかはつきりとは決めがたいと云ふのであつた。

二日後ヒューストンとハウスが一五、五〇〇呎に登つて知り得たことは、キヤムプ・サイトが全く無いと云ふことであつた。彼等は約廿年前アブルツチ稜の残した木箱の風化された三片をもちかへつた。

さて最後に残されたルートは東北尾根である。彼等全員は既に其長大な且處々氷に輝く尾根をゴドウィン・オウステイン氷河の上部から眺めてきた。六月廿二日、ヒューストン・ベイツ、バードサルはこれを間近から偵察した。それによると案外可能性ある様に思はれたが、最後の絶壁は極度の困難さを思はしめた。K2の絶壁は何れの方面からも實に悪く見えるのであるが、此の東北面は一段と困難さを増してゐるのである。數日後ヒューストンとストリート・フィールドとは東北尾根の基部にキヤムプを設置し、二〇、〇〇〇呎以上に達したが、其後起つた恐ろしき暴風は彼等をB・Cに追ひかへしてしまつた。が天氣の回復を俟つて直ちに東北尾根に向はんとしてゐる。――六月廿日附B・Cから發せられた通信は以上を以て終つてゐるが、彼

等六人中の何れかが二六、〇〇〇呎の驚異的高度に達したのは此のしばらく後、即ち七月中旬頃の事であらう。かくして五月中旬スリナガルを去つて以來約三ヶ月目に無事カシミールの都に歸還したのであつた。とまれ前記の通信中にて、比較的不運な天候と戦ひつゝ、K2の異なつた方面から二〇、〇〇〇呎以上に達せしこと五度、更に其後二六、〇〇〇呎に達したこの遠征隊は、彼等の所期の、即ち偵察行と云ふ目的を完全に成遂げたとみて然るべきであらう。

マシヤブルム

今年五月下旬から開始されたカラコラムのマシヤブルム（二五、六六〇呎）の攻撃は結局未登頂に終つたが二五、〇〇〇呎に迄達してをる。一行は先年ナンド・デヴィに行つたグラハム・ブラウン及びB・B・ハリソン、J・O・M・ロバーツ、J・ウオーラー等の錚々たる人々四人で、四月下旬スリナガルを出發した。彼等は登路を先づマシヤブルム氷河に求め、五月廿九日、一三、八〇〇呎にB・Cを設けた。かくてルートは、マシヤブルム主峯とその東峯との間の甚大な萬年雪の箇所から垂れ下つてゐる數個の支氷河（その何れにも上部に氷瀑がある）の一つに求めた。この支氷河の基部へはB・Cから約一時間位であつた。天候は良くなかつたが五月廿日から六

月十一日の間に順々にキャムプを設置した。即ちCⅠを一六、九五〇呎、CⅡを一七、九〇〇呎、CⅢを一八、一七五呎、CⅣを二〇、七五〇呎、CⅤを二一、三五〇呎の地點に。CⅣ即ち最後のキャムプの位置は前記の大なる萬年雪の直下なる氷瀑の下であつた。六月十二日には上部の萬年雪の箇所を達し、十三日は終日ルートにつき協議し、十四日にはパーティーの中二人は二人の夫と四分の食糧とをもつて出發し萬年雪の箇所CⅤを設立した。十五日、最初の豫定たる南稜をとることをやめて、東面の基部なる氷河に近く二三、五〇〇呎の地點に天幕を進めてCⅥとなした。天候悪く降雪を見たが、翌十六日一寸の晴間を利用して、二人の者は、天幕をその東面上二四、六〇〇呎にすゝめて、CⅦとなし、翌十七日此處から彼等は最後の一〇〇呎を登らんとした。登路は東稜の上部をとり、そこに於て彼等は烈風と困難な岩場に遭着して遂に二五、〇〇〇呎から引きかへした。CⅦにかへると天氣は又くづれた。降雪多量でCⅦ危くなり、二人は一〇〇呎下方のCⅥ（そこには二人の夫がゐる）へ向つて、降雪中を下りた。が、視界を全く遮られ遂にCⅥを見出すことが出来なかつた。一方殘留せる二人の者は當時既にCⅤを確保し、その一人はこの日全人夫をつれてCⅥに來たが、登攀に向つた二人を心配して搜索に出かけた。

が努力は無駄であり、二人はクレヴァスの中につらい一夜をおくつた。十九日に幾分雪も小やみとなり、二人はやつとCⅦに歸還したが、彼等の凍傷は烈しく直ちに下山を餘儀なくせられ、深雪中を降つて廿二日にマシヤブルム氷河のB・Cに歸着した。かくて再度の攻撃は阻まれたが、皮肉にもその後天候は良くなり、前記の如き、烈しき凍傷がなければ、おそらく登頂に成功したであらうと云はれてゐる。

獨逸隊ガルワールへ向ふ

R・シユヴァルツグルーバーの率いる獨逸隊は八月中旬印度に至り、既に英國の輸送官指揮の下に人夫の整備等を行ひ、ムスリーを出發した。一行は八月下旬にガンゴトリの近くにB・Cを設け、パドリナート、ケダルナート等を登る計畫で、十一月中旬歸還の豫定である。

ムムバーは、前記の隊長の外にコिकास等で經驗をつんだW・フラウエン・ベルガー、E・エルマンタラー、L・シユパンラスト、ルドルフ・ジョンズ等の人々である。

（追記）以上三つの記事はステイツマン紙其他に掲載せられたものをビツクアップしたのであるが、それ等の切抜きは岳友森脇兄が熱心に集めて小生に送つて呉れたものである。

（望月記）

陸地測量部出版地圖目錄

昭和拾參年三月卅日出版

五萬分一地形圖 修正 張一面
宇治山田 十三號 名 張一面
二萬五千分一朝鮮地形圖 修正
清津及羅南地方

七號 漁游洞 一面
五萬分一朝鮮地形圖 修正
城津 十三號 城津 一面
惠山嶺 三號 延岩 一面
吉州 十六號 城津北部 一面
珍島 十號 珍島 一面

東亞五十萬分一圖 新版
山東高角 一面
威海衛 一面
青島 一面

東亞五十萬分一圖 新版
永平 一面
青島 一面
沂州 一面
北平 一面
濟南 一面
兗州 一面
大湖 一面
代州 一面
太原 一面
彰德 一面
歸化 一面
河曲 一面
汾陽 一面
平陽 一面

東亞五十萬分一圖 新版

昭和拾參年四月卅日出版

二萬五千分一地形圖
宇治山田近傍 十二號 五ヶ所浦 一面
尾道及竹原近傍 六號 能地 一面
同 八號 竹原 一面
同 九號 明神 一面
五萬分一地形圖 修正
東京 四號 木更津 一面
東海 一號 鹿野山 一面
橫須賀 一號 船木 一面
山口 十六號 船木 一面
岡山及九龜十五號 土生 一面
廣島 二號 竹原 一面
同 三號 津部 一面
中津 十三號 宇部 一面
二萬五千分一朝鮮地形圖 修正
清津及羅南地方

三號 輪城 一面
五萬分一朝鮮地形圖 修正
羅南 八號 朱村後場 一面
吉州 九號 明川 一面
二十萬分一帝國圖 修正
大社 一面
廣島 一面
岡山及九龜 一面
箱根近傍 一面
箱根近傍 一面
（一色）

昭和拾參年五月卅日出版
五萬分一地形圖 修正
高田 十二號 中野 一面

名古屋 十六號 上野 一面
小倉 四號 吉井 一面
飯島 二號 中飯 一面
同 七號 手打 一面
五萬分一朝鮮地形圖 修正
吉州 十號 古站洞 一面
珍島 九號 右水營 一面
羅南 一號 連津 一面
五十萬分一輿地圖 修正
四百萬分一支那全圖 新湯 一面

（二枚一組）一面
昭和拾參年六月卅日出版
五萬分一地形圖 修正
小倉 三號 後藤寺 一面
飯島 一號 里村 一面
二十萬分一帝國圖 修正
開開岳 一面

昭和拾參年七月卅日出版
二萬五千分一地形圖
岩國及柳井近傍 十一號 室積 一面
五萬分一地形圖 修正
山口 四號 須々萬本郷 一面
同 八號 防府 一面
中津 一號 室積 一面
同 五號 小田 一面
二十萬分一帝國圖 修正
山口 一面
津口 一面

昭和拾參年八月卅日出版
五萬分一朝鮮地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

五萬分一地形圖 修正
羅南 六號 羅南 一面
百萬分一 新版
中支部 一面

「山岳と會報」を見て

額田 敏

本日「山岳」第三十三年一號と會報七九號が届きまして、早速拜見致しました。「山岳」は歴史的な文獻で、時局の影響の爲めか山岳登攀の活氣を缺いて居ることを見出して失望しましたが、會報は非常に面白く、多方面な記事で賑つて居ることを拜見



しました。

現在は時局下に在りとは謂へ、日本山岳會員は既に山へは相當な年期を入れた猛者揃ひと思つて居ります。山岳にあの様な懐古的な文獻計り載せなければならぬ程に氣分がゆるみ原稿が無いのでしょうか、書く人が居ないのでしやうか、若し之が實際に眞實でありとすれば、日本山岳會は既に存在の意義が消滅して居

るのでは無いかと思ひます。

私は斯の様な事は信じ度くありません、現在の役員の方々は少くとも山に對して非常に豊富の學識と經驗とを兼備された有能な士の揃つて居ることを信じます、そして實踐的な事に於ては一騎當千の士と信じます。その様な人達が熱情を以つて愛好し、信仰する山に對して骨惜しむすることも考へられませんか。

◇ 信 通 員 會 ◇

多數の會員を有する日本

山岳會の山岳が現代的な活氣を失つて居ることは實に悲しむべきことであります。或る意味から云へば懐古的な文獻をひもといて山を温古的に考へるのも結構な事です、世界は既にヒマラヤの諸峯を目標に置いてゐる時代であります。實行的な計畫はこゝ暫らく出来ないにしても、その準備的な用意を、研究を、著々とし（既に出来つゝあれば實に結構ですが）て行ひ、又

斯かる氣分を濃厚にする様な發表があつてもいいかと思ひます。

又日本山岳會會員中にはその爲めに不言實行しつゝある人も多い事と思ひます、斯かる人々の書かれたものを發表することは出来ない相談ではないと信じます。それは一つに役員のお骨折によりてその方面へ當つて熱と力と頑張りて日本山岳會へも盡される様、骨惜みされない様にお

願する次第であります。

次に會報を拜見して「時局と登山」と云ふ様な貴文を拜見致しました、同感の至りであります。

我々は既に十年乃至それ以上山に對しての熱情を以て居りまして、今更業々しく體位向上などの爲めにこれから山に登らなくとも、寧ろ時局下に於ては、今迄に鍊へた軀と力を以つて日常の事に當るべきと思ひます。非常時局下の夫々の務めに當るべきだと思ひます。今更事新し相に體位向上を叫ぶのはお互に憤み度いと思ふのであります。間に合はぬ事です。尤も斯く云はなければならぬ人ならば致し方ありませんが、未曾有の國難を克服するには、これから準備しては第一餘りに遅過ぎる事でしょう。

又時局下に於てすら山に行かなければ體が保たれぬ様な者は無いはずと思ひます。山に暫らく行かなければ働けない様な弱い精神を持つ者は無いと思ひます。若し斯様な人があるとすれば其の様な人の今迄歴史を持つた登山と云ふものは只興味ばかりからであつて、彼等の中味のない人生に意義を持たない、ほんの遊興であつたに過ぎない事になります。日本山岳會も斯かる遊興心をそゝる會合であつたに過ぎないこととなります。斯ふなると重大な面目問題となりませう。

我々は「山岳」の内容が單に貧弱だとか、山岳の發行が遅れて居ると

かを云ふよりも、その内容の内に漲る意力を考へ度いのであります。我々は若し國策上の理由あらば山岳の發行は一時中止されても文句はありません。而し斯かる理由に由りて日本山岳會員の緊密なる關係が、その精神が、遲緩する様な事があつてはならず、益々その會の精神を振立てて、報公の誠を實踐しなければならぬと思ふものであります。

ス キ ス から

八月七日にツエルマツト、八日にシエーンビュール小舎へ、九日荒天で滞在、十日にフィアアエーゼルグラートをダン・ブランシュに登り、

マツターホルンのツムトグラートは新雪で駄目らしいので、十一日ツエルマツト、十二日グリンデルワルドに戻りました。僕達がダン・ブランシュに登つた日、三組ツムツト稜に出掛けましたが、生きて戻つたのは二人だけで五人はティーフエンマツテン氷河に死體となつて埋まつてゐます。その翌日はオーベルガーベルホルンで三人、シャリグラートで三人死んだ相です。昨今猛烈な悪天候です。

フィアアエーゼルグラートは大變な悪場つゞきで、流石に凄じいと思ひました。午前二時小舎を出て頂上が正午、歸着は午後五時。この山稜の岩のジャンダルムと錯綜した雪庇とにはブラバンドも相當手古摺で、頂上に着いたときは、どつかと腰を下

ろして「アルマーチやないが自分達もフィアアエーゼルだ」と絶叫してゐました。明日天候回復すればエンゲルヘルナーへゆきます。こゝ暫く高い山は新雪で駄目らしいので困つてゐます。（八月十四日付）

エンゲルヘルナーでは第一ミツテルグルツペとシメリシトツクのトラヴァス。第二日にキングシュビッツエに登つてこゝまで戻りました。岩登りは矢張り岩専門の處だけあつて、とてもむづかしくブラバンドの言によればドロミテ程度だ相ですがクレツテルシュウを穿いてゐたのでそれ程とも感じませんでした。

その後すぐビーチホルンに行き、ビーチホルン小舎で雨のため三日滞在の後、北尾根から登つて北東尾根をバルチーデルヨツホに下り、長い谷を里に下りました。新雪が氷をかくしてゐたので割合にやさしく登れましたが、山としては端正な難つた感じのいゝ山でした。クラウゼの小舎は實に美しい所です。長い谷を下つてゆくとき、これを溯つた松方兄達のへばり方を想像しました。

それから一日おいて、二十四日に又グレッツクシタイン小舎に登り、翌二十五日にグロースシュレックホルン東北壁の初登攀をしました。ルートは同封繪葉書に記入した通りです。小舎を午前一時半に出て、頂上の約二〇米南の稜線に十一時半頃登り切つたときは、さすがに喜びと感激で一杯でした。普通のルートをシ

トラールエックに下り一日休養、二十七日南尾根を再びグロースシュレックホルンに登り、アングラッソングラートを下つて、グリーンデルワルドに歸へりました。南尾根とも相當むつかしいですが、特に南尾根の岩のすつきりした堅さは素晴らしい、日本にもこんな處があつたならばと思ひました。

まあこんな具合で八月の山は一段落の形です。踏んだ頂上の数は少いですが、最後に大物をやれたことを喜んでゐます。

九月に入つてからザース・フエーに行つて、例のヘルマンとあの邊を歩く積りです。それにしても貴兄がもう一夏こちらにゐられたならと残念に思ひます。(八月二十八日)

グリーンデルワルドにて、

田口 一郎

(藤島宛)

シュレックホルン東北壁初登攀に就ての記述は略圖を添付するの要あるを以て遺憾乍ら割愛削除した(藤島附記)

三軒茶屋より

前略 入營以來既に一ヶ月になりました、白紙で來ましたが九月一日より赤紙と變更致しましたので、時に何年御奉公致すか分りません。山の合宿で覺えたことと同じ様に圓いオワンの飯です。ヒマラヤの報告も未だ完成しないので残念に思つて居ります。秋空を眺めて、馬に水飼を

しながら、ウロリ、ヘルターと唄が口元まで出て來ます。その中小生も、支那の天地に飛び立つことになりませう。

皆様によろしく 草々

三軒茶屋瀨尾部隊橋本隊

第四班 濱野正男

四國ノ山

皆サン御元キデスカ久シブリニ四國ノ山ヲアルキマシタ九月八日面河溪ヲカンシヨウシテ九月九日四國ノ盟主石鏡山ニ登リマシタ、御來光ノタキヲミルアタリカラ頂ハガスニオウワレトキドキシカ姿ヲ表ワサズ、頂上ニツイタ頃ハホトンド眺望ガナクナリマシタガテンゲ岳ニ登ツタ時、土小屋、カメカ森、筒上、手箱ニツツク美シイ尾根ガ申譯ノ様ニワズカノ間カラヲミセテクレマシタ、コノタビノヨテイ日數モ残り少クナツタノト又天氣ガクツレハジメタノデ土小屋泊リヲ止シテ主峰ノミヲ越シテ黒川ノ谷ニ雨ノ中ヲ下リマシタ。

ミヤサケケンイチ

九州から

我等の先輩で九州の山山の著者の北田正三氏は、今北支の山野を皇國の爲め日夜駆廻つて居られる、此の外、日本山岳會員にして數多出征せられる方々もあらんと思ふ、是等の岳友に對し心から感謝を表するものである。入會日尚淺いが先輩の誘導に依つて狭い九州の山は屋久島を除

く外大抵登りつくして季節を變へた登山も又味のある事を知り、も一度行きたいと思つた山に谷にステッキを運ぶ。非常時銃後の我等工人、暇(と云つては失禮だ)に恵まれず、中國から信越の憧れの高山には正月前

「山岳」第三十三年第二號

冬の小長白山 早大山岳部
伊奈川と中御所谷 吉澤 一郎
鳥甲山 中村 謙
ケラス小傳 望月 達夫
マツターホルンの山名に就て 吉澤 一郎

此の外、登山といふものを哲學的に視た小論文が載る様になるかも知れません。近頃「山岳」に對する眞面目な御批評を澤山戴きますが、之も結局、人の問題に歸する事で今後は會員諸士の御協力の許に大いに張り切つて行き度いと思ひます。

今度は寫眞も地圖も數葉あり約二百五十頁になる豫定で、十一月下旬には發行の運びとなりませう。

(係)

後を利用するより外、方策が考へ出せない……諸賢の御指導を仰いでやまぬ。以上

石田嘉郎

「包」便り

つい二・三日前に出發したやうな

氣がしますが家を出てもう一ヶ月近くなりませう。旅をしてゐると月日の經つのが随分早いやうに思はれます兵舎、ラマ廟、或は蒙古の包に、ときには草原に露營の夢をかきねつゝ一同頗る元氣で内蒙古の高原を駆け廻つてゐます。外蒙古にほど近きシヤランガツシヨースムを訪れ、また黄河に船を浮べ、陰山々脈も幾度か越えました。

物資補給のため綏遠へ下つたわづかの間に蒙古高原の秋色はとみに加はり、山も大分色づき、農民は秋のとり入れに忙しそであります。

大體海拔千四・五百米の邊を通つてゐます、ときには千八百米近くまで登ることもあり、短い間ですが、氣温は最高二十八度、最低零下三度、この頃は日中は十六・七度、夜は零度位で、朝は大低薄水をみます。氣候は大陸的と言はれてゐますが寢袋のせい、か夜はさほど寒さを感じませんが、午前中はやはり外套をはなせません。

九月十二日

陶林縣土木營臺にて

(アイウエオ順)

淺井東一
今西錦司
加藤泰安
木原均
間直之助
平吉功
宮崎武夫



會務報告

第八十六回小集會

十月 六 日

於日本橋商工俱樂部

暑かつた夏を送つて久しぶりの小集會は最近フランスから迎へ歸した藤島敏男氏に「スイス雜談」と題し歸朝土産話と幻燈を御願ひした。講演の内容は何れ山岳に纏つて現はれることになつて居るので一々こゝでは述べないが講演後の同氏撮影にかゝるライカの幻燈百餘枚はまことに鮮明でその講演と共に新鮮なアチラの空氣を場内に満溢れさすに充分であつた。

終りに御多忙中御講演を快諾された同氏に對して厚く御禮申し上げます

(中司)

來會者

村尾、青木、新庄、折井、田邊、堀田、鳥山、成瀬、茨木、飛川、野口、角田、坂本、奥平、目黒、藤島、辻、坂倉、田口、斯波、笈川、福田、山田、大島、大内、坂江、田中、吉田、山崎、初見、神谷、望月、吉澤、高頭、森田、齋藤、石原、酒井、佐

藤、吉田、中司、西堀、和田、黒田
田中(菅雄)、宮本、大平、二崎、岩
永、岩崎、兼松、一高旅行部二名、
藤島(千代子)、藤島(孝子)の諸氏。
以上 五十五名

會員計報

新京 平山智廣氏(昭和十年十二月
入會、會員章番號一六一九)
昭和十三年七月逝去せらる、本會は
茲に謹みて哀悼の意を表す。

新着圖書

京都山岳 第九號 其 會
歩行 九・十 獎健歩行會
旅路 九・十月 關東旅行クラブ
VORWARTS 第十號 東鐵山男の會
アルカウ趣味 九・十
アルカウ 九・十 日本アルカウ會
はひまつ 第八號 偃松山岳會
登山とスキー 十月 其 社

岩雪崩	I・M・C・山岳會
東京登歩溪流會々報 九・十號	東京旅行クラブ會報 十同
横濱山岳會々報 第一〇三號	福岡山の會々報 九 同 會
ガムス 第十四號 山岳巡禮俱樂部	甲山峽水 十月 山梨縣景勝地協會
頂 六・七 頂山岳會	やまびこ 十月 同 會
山小屋 九・十 明文堂	ペデスツリヤン 九・十 關西徒步會
東京市山岳部報 九	Die Alpen, Les Alpes, Le Alpi 8,9
K・R・C・C・ 九州登岩俱樂部	Planinski Vestnik 7,8
北大山岳部々報 北大文武會山岳部	The Geographical Journal 8
ツリリスト 九・十 日本旅行協會	Ia Montagne 7
名古屋山岳會々報 九	The Mountaineer 9
臺灣山岳會々報 九 同 會	De Bergids 9
旅行 九月 東京旅行クラブ	Natural History 9
こだま 八・九 東京嶺嶺山岳會	Trail and Timberline 8
峠の會々報 第二號 同 會	The Prairie Club 9
中部山岳 九月號 國立公園協會	Sierra Club Bulletin 8
山峽 同 杉並區役所山岳部	Centro Alpino Italiano XVI
山岳趣味 九・十月號	立山紀行 佐藤月窓著 中島正文氏
大阪ミテコー會山岳部	四國ノ屋根(地圖) 吉永虎馬氏
安田山岳部月報 同 會	
白峰 九月號 大阪探險俱樂部	
國立公園 同 協 會	
因伯民談 五ノ二 鳥取郷土會	
地學雜誌 九月號 東京地學協會	
魚市場山岳會々報 九 同 會	
山幸 五十九號 阪神山岳會	
アルプス銀座 肥前山岳俱樂部	
G・R・K・ 九月 かくれい會	
白樺 九六・九七 白樺旅行會	
T・S・K・ 九月 旅の趣味會	
熊本アルカウ會々報 九 同 會	
廣島山岳會々報 十月號 同 會	
物理學校山岳會々報 同 會	
趣味 十月 日本アルカウ會	
山 十月 横濱山岳會	

寄贈圖書

東京旅行クラブ會報 十同 會
福岡山の會々報 九 同 會
甲山峽水 十月 山梨縣景勝地協會
やまびこ 十月 同 會
ペデスツリヤン 九・十 關西徒步會
Die Alpen, Les Alpes, Le Alpi 8,9
Planinski Vestnik 7,8
The Geographical Journal 8
Ia Montagne 7
The Mountaineer 9
De Bergids 9
Natural History 9
Trail and Timberline 8
The Prairie Club 9
Sierra Club Bulletin 8
Centro Alpino Italiano XVI

編輯室より

會報の編輯を引受けてから今度で
六回目を出す事になりました。始め
の内は缺でチョン切つたり糊で貼り
つけたり此處まで前頁へ送る、杯と
色々詰らぬ事を夢にまで見てうなさ
れた程でありましたが此の頃は大部
圖々しくなりそれに原稿の集りもよ
くて興味も出、油も乗つて来た様で
あります。然し會社にも務めて居れ
ば人間並に用事もあり、中々思ふ様
に會員諸氏の御満足を得る様にはな

らす恐縮してゐる次第であります。
載せる場所が出来たらら Camp Six
の迷譯も續きを出さうと思つて居ま
す。

袋一平氏の文中に挿入したホテル
の繪は先日熊本へ轉勤された理事早
川義郎氏の筆になるものでありま
す。

「山日記」及「山岳」バック ナンバーの件

本年度の「山日記」がまだ少し残
つて居りますから會員よりの御申込
みに限り頒賃一圓送料本會負擔にて
御頒ち致します。

「山岳」のバックナンバーも残り少
くなりましたが十月一杯の御申込み
に限り取扱ふ事に致しますから至急
御手続き下さい。

昭和十三年十月十五日印刷
昭和十三年十月十六日發行

東京市大森區堤方町六一五
發行兼編輯者 吉澤一郎
東京市芝區榮町一丁目十三番地
發行所 日本山岳會
電話(四三)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區榮町一丁目十三番地
印刷所 成文堂印刷所